

平取町二風谷のカンカン(動物や人間の大腸・小腸)沢から見る夏至の日の夕陽は『オブシヌプリ』(穴があいている山)にびたりと入る。オブシヌプリに伝わる伝説は、昔、十勝地方のアイヌが沙流川に攻めてきたとき、オキクルミカムイ(生活文化を伝えた神)が、互いに血を流すことを避けるために技くらべをしようと提案。最初にオキクルミがよもぎの矢を川向こうの山に射ると、見事に岩山に穴があいた。十勝からきたアイヌはそれを見て度肝を抜かれて帰っていった、というもの。



かつて旭川市西部にある山の大きな岩石付近に、ワシやタカが生息していた。アイヌの人たちはいつしか、山周辺の地域を「チカプニ」と呼ぶようになった。「チカプ」はアイヌ語で鳥、「ニ」は場所を意味する。

◆かつての姿、連想できる旭川市近文(ちかぶみ)。「チカプニ」が音訳されてできた地名だ。かつて近文アイヌコタン(集落)があった。

地名の由来となった岩石は今の近文山にあり、そこから嵐山にかけて一帯は聖地(チノミシリ)でもあった。

「アイヌ語の地名はそこが良い所なのか、悪い所なのか。何が採れるのか、どんな生き物がいるのか分かるんだよ。子供のころ祖母から『ウエンナイには行くな』と言われた。悪い場所という意味で、行ってみるとがけの、ひどいところだった」。近文で生まれ育ったアイヌの杉村フサさん(73)は語る。アイヌ文化伝承者の1人だ。

近文から南西に春志内(はるしな)という所がある。「食料が群生する沢」という意味のアイヌ語「ハルウシナイ」が由来とされる。

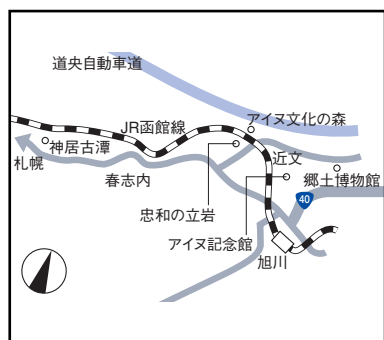
さらに南西に、景勝地として有名な神居古潭(かむいこたん)。「カムイコタン」は「神の居所」という意味だが、ここの神は魔神。川の流れる急で転覆事故が相次ぎ、アイヌに恐れられていたという。点在する岩は魔神が退治され、バラバラになったものという伝説が残る。

杉村さんが子供のころ、自宅の窓から遠くの山々が見渡せた。南東には大雪山系、北西には嵐山。近くには小川がせせらぎ、ドジョウがたくさん生息していた。雪解けになると、母とともに山で木を採取。ハルウシナイなどで山菜を採っては保存した。いずれも厳しい冬への備えだった。秋には川にサケがうようよしていた。

近文コタンは今はない。嵐山公園にある「アイヌ伝承のコタン」など、一部にその名残があるにすぎない。アイヌ語を話せる人もいなくなった。

「川を改修して、魚を住めなくして。洪水が起きるなら、そこに住まなければいい。危ないなら、川に近づかなければいい。自然がなくなったのはくやしいよ」。杉村さんの表情が曇った。

Data



●お問合せ先

平取町二風立アイヌ文化博物館

Tel.01457-2-2892

旭川市教委生涯学習課文化振興係

Tel.0166-25-7558

まちづくりと遺産

道など、アイヌ語併記の看板設置

北海道の地名のうち約8割がアイヌ語由来とされる。北海道開発局や道は、アイヌ語を併記した看板を設置するようになった。

旭川市は昨年7月に「アイヌ語地名表記推進懇談会」を設置、学者やアイヌ語研究家、アイヌ民族の市民の計7人で検討を重ねている。97年のアイヌ新法制定を受け、市はアイヌ文化の振興策を検討していた。「地名から入れば市民がアイヌ語に興味を持ち、文化にも関心を持つようになる」(市教委文化振興係)という発想だ。

来年中に、市内の約5カ所にアイヌ語と日本語を併記した看板を設置する予定。忠別川、牛朱別川、神居古潭、近文など約30カ所が候補に挙がっている。

従来のアイヌ語を併記した看板には、アイヌ語が小さく表記され由来の分からないケースもあった。同文化振興係は「アイヌ語と日本語の地名を同じ大きさにしたい。どうしてこの地名ができたのか由来の分かるものにしたい」と話している。